

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520712

研究課題名（和文）文化遺産の担い手に関する民族誌：アソシエーションの公共性に関する人類学的考察

研究課題名（英文）Actors In Relation With Cultural Heritage: An Anthropological Analysis About Publicity Of The Associations.

研究代表者

竹中 宏子（TAKENAKA HIROKO）

早稲田大学・人間科学学術院・准教授

研究者番号：30376967

研究成果の概要（和文）：

本研究は、文化遺産の現実を、それを担う主体のアソシエーションとその会員の動きに関する民族誌として記述することを目的とし、アソシエーション・その会員である個人・文化遺産の間の関係について人類学的に考察を行い、文化遺産を担う主体の動きから創造される現代的な地域性と、地域住民の間に構築される共同性を議論している。扱う事例は、サンティアゴ巡礼路とこれに関わり活動を展開するアソシエーションや個人で、調査地としてはスペイン国内であるが、主にガリシア（州）を対象とした。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to describe ethnographically the reality of cultural heritage, focusing upon activities of the voluntary associations and their members that are working for heritage conservation in Galicia, Spain. It examines relations between local organizations for heritage protection, their members, and what they consider as their heritage. Furthermore, it discuss locality constructed through the activities and collaborations among the locals. The ethnographic fieldwork was conducted mainly in the Galicia region. It especially concentrates on the case of St. James Pilgrimage Route (Caminos de Santiago) and the voluntary associations and their members working for the protection of this pilgrimage route as heritage.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民族学

キーワード：

遺産化、アソシエーション、共同性、個人、地域性、サンティアゴ巡礼路、ガリシア（スペイン）

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、それまで一貫して、地域に

根差した文化活動を続けるアソシエーションの視点から地域文化の表象が創造される

過程を、人類学的方法を用いて研究を行ってきた。常にスペインで調査を行ってきたが、その中で近年、ガリシア（州）に関する地域文化の創造過程に焦点を絞り、特に、ガリシア全体に社会的インパクトをもたらすサンティアゴ巡礼路に着目していた。平成15～18年度に複数回行った短期間の調査から、地域文化の表象は行政や地元住民など様々なレベルで創造されるのだが、ガリシアに関して言えば、サンティアゴ巡礼が地域文化と密接にかかわっていること、そして地域文化の現実を支え持続させているのは、実際にはアソシエーションであることを認識した。このような調査地における現実の把握を踏まえ、世界遺産にも登録され、一般にユニヴァーサルなものとして理解される「サンティアゴ巡礼（路）」と地域文化の関わり、そして、その関係性におけるアソシエーションの役割を解明したいと考えた。ただし、アソシエーションを単なる文化活動の主体と捉え、その沿革のみをみるのではなく、集団を構成する個人も主体として捉え、ミクロに考察すべきであると考えた。つまり、アソシエーション活動の場面のみならず、会員の個人史と日常生活全体を詳細に分析すれば、彼らと文化遺産との関係性やその様態を多角的に把握でき、遺産を通して表象される地域性の創造メカニズムがより動的に解明されると考えたのである。

本研究は、アソシエーション研究としてのみではなく、文化遺産の人類学と称することができるだろう。文化遺産に関して、従来、様々な分野から研究が進められてきた。文化人類学において、遺産の問題は文化の客体化あるいは伝統の創出論として、地域伝統の再構築や文化創造などのプロセスが明らかにされてきた。また、当該社会に与えるインパクトが、特に観光との関係で研究され、遺産の社会的用法が検討されてきた。しかし、アソシエーションや多様な個人から支えられる文化遺産という視点からの詳細な研究、すなわち文化遺産の担い手そのものに関する研究は蓄積が少ないという状況にあった。その少ない研究の中で、川森や才津の議論は、地域の文化遺産に関わる担い手の視点から行われた研究であり、本研究の初期段階では大いに参考となった（川森博司「現代日本における観光と地域社会—ふるさと観光の担い手たち」、『民俗学研究』66-1,2001,pp.68-86.; 才津祐美子,『世界遺産『白川郷』の『記憶』, 岩本通弥編『記憶』, 朝倉書店,2003,pp.204-227.）。それらにおいては本研究で議論される、遺産の保護活動過程を通して形成される共同性、または社会運動論的な視点はあまり重視されていないと思われる。本研究では、主体と文化遺産のみならず、文化活動を通して創造される共同性や社会性

も視野に入れた。

2. 研究の目的

本研究は、文化遺産を担うアソシエーション会員それぞれの個人史と実際の生活から立ち上がる民族誌を、文化遺産との関係で描くことを目的としている。ここではサンティアゴ巡礼路を含めた地域に存在する文化遺産にかかわり、文化活動を展開するアソシエーションとその会員を対象に研究を進めていく。そこから地域社会における文化遺産の社会的用法、および、遺産を通して表象される地域性が明らかになる。また、地域性や地域アイデンティティが多様な社会的背景や属性をもった個人から創造されているという実態、そしてそのことが社会を変更し得る社会運動的な性格も帯びる様態の把握を試みる。

3. 研究の方法

本研究は、人類学的方法を基本に行われた。すなわち、年1～2回（2週間～4週間/回）の現地におけるフィールドワークを基礎として、データの分析と考察を行った。

具体的な調査地は、スペイン・ガリシア内でサンティアゴ巡礼路が通過する地域である「死の海岸地域」（海岸部）と「ウジョア地域」（内陸部）である。そこでサンティアゴ巡礼および地域の文化遺産に関して活動を展開するアソシエーションを対象に、次の通り調査は行われた。

第一に、当該地域の歴史と現状を文献・資料、場合によっては聞き取り調査で把握し、異なる地域におけるサンティアゴ巡礼路の意味や社会的用法を考察する。

第二に、アソシエーションの沿革と、そこでキーパーソンとなる個人のライフヒストリーを聞き取り、個人の視点からアソシエーションおよびその活動と、文化遺産・アソシエーション・個人（会員）との関係性を考察する。

4. 研究成果

研究期間内に、2週間から1ヶ月ほどのフィールドワークを合計4回行った。内容としては、サンティアゴ巡礼に関わる複数のアソシエーションの中から「サンティアゴ巡礼路友の会・ガリシア」、「オス・ロボス」、「ネリア」に絞り、彼らの活動を継続して追った。また、会の鍵となる人物を抽出し、個人の視点から文化遺産に関わる活動も調査した。ここで着目した個人は、「地域文化コーディネーター」と呼ぶこととし、彼らに関する考察を行った。

さらに、調査の過程でサンティアゴ巡礼について、全国レベルで影響力をもち、そのため重要だとみなした「スペイン・サンティア

ゴ巡礼路友の会連盟」に対する調査も行った。当組織は、「巡礼ホスピタリティ」の構築に積極的に関わり、間接的に巡礼リピーターを推進し、巡礼者と巡礼路沿いの地域社会をつなげる役割も担っている。具体的には、巡礼宿で巡礼者を迎え入れる「オスピタレロ」になるための研修制度に参加し、実際に「オスピタレロ」として巡礼宿で働き、参与観察を行った。

これらのフィールドワークを通じて、(1)アソシエーションに加え、その構成員である個人（地域文化コーディネーター）の視点からの調査・研究の重要性が捉えられ、(2)そこから新たに結ばれる地域の共同性を垣間見ることができた。さらに、(3)巡礼路が通過する地域社会にとって、経済的・社会的な理由で、今や巡礼者はなくてはならない存在であるが、その巡礼者を引きつけるために重要な「巡礼スピリット」の現代的な構築過程が考察できた。これら3点については、次の通り成果として論文発表などを行った。

(1)「死の海岸地域」およびそこを通過するサンティアゴ巡礼路の一つである「フィステラ＝ムシエアの道」に関する遺産化の過程を考察した。ここでは、まず、アソシエーション「ネリア」と「サンティアゴ巡礼路友の会・ガリシア」が重要な役割を果たしていたことを把握したが、さらに会員である個人のレベルにまで踏み込んで考察する重要性がみとめられた。本研究で対象とした個人は、地元の博物館をコーディネートしたり、文化遺産に関する調査や現状報告書を作成、さらにそれを宣伝・普及するアイデアを提供する仕事などをフリーランス（あるいはそれに近い形）で行う、アソシエーションの会員でもある個人のことで、「地域文化コーディネーター」と称している。

個人の視点の重要性の第一点目は、遺産の意味の重層性が明確になったことである。つまり、アソシエーションの視点からは、地域に存在する本質的で正統な文化遺産であっても、そこには地域活性化という「思惑」が背景にあることがみとめられたが、さらにミクロな地域文化コーディネーターの視点からは、彼らの個人的な故郷への「想い」がアソシエーション活動を通じて実現されていく様態が見て取れたのである。これは、公的な存在であるべき文化遺産には、集団レベルでの記憶や思惑が込められているだけでなく、顔が見える個人の想いも意味の重層性の一部を成しているということである。

第二点目は、資源の文化化というシステムが個人の視点から明らかになったことである。このようなシステムにおいては、地域文化コーディネーターのような特殊な個人の存在が不可欠であり、それは適切な手段をも

つリーダーである。遺産化を起こす個人の最大の特徴は、私的な想いの強さではなく、その想いを実現させるための知識や方法といったスキルをもっていることである。つまり、想いを言語化し、そのストラテジーを法律などと照らし合わせて理論的、合理的に組み立てられる人物なのである。（〔雑誌論文〕2として発表）

(2) 同様の調査から、現代社会における地域の共同性の地平を創造する個人の力を考察することができた。つまり、アソシエーションと個人の関係性を、特に個人の視点から捉える試みを行ったのである。そこでは、アソシエーションを介して文化遺産に関わる個人と、アソシエーションを介さない形で文化遺産に関わる個人に整理し、さらにアソシエーション活動の経験をへて、特定の集団には属さないが、既存のアソシエーションを動かすような個人の動きも捉えることができた。これはアソシエーションを介さない形で文化遺産に関わる「個人の集まり」であるが、組織ではない。何かしらの行動を起こすには経済的援助が必要であるが、行政機関などから援助を受けるとそれなりの束縛が生じる。そうすると、目的から多少逸脱した活動の広がりや、他の集団や機関との連携やネットワーク形成が困難になり、真の問題解決にはつながらない。それならば、問題解決に適していると思われる既存のアソシエーションを動かし、自分たちは常に自由に動ける位置にいる、という考えから出た行為である。そのため彼らは、どのアソシエーションが真に地域のことを考えて活動しているかを常に見極めている。こうして彼らは、アソシエーション間をつなげるところに位置し、キャスティングボードを握る。このような行為によって、多面性を帯びる問題などにも柔軟に対処しようという意図をもっているのである。

これまで一般に、個人よりも集団で行動する方が社会の現状を改善しやすく、アソシエーションが地域における資源の文化化の担い手および主体として取り上げられることが多かった。しかし本研究で取り上げた個人は、アソシエーションに深く関わりながらもそこからはみ出した行為において、逆にアソシエーションとは距離をとりながら外部から関係をもつことによって、衰退した地域の活性化に一役買っていた。いずれの場合も、自己実現や愛郷心のような「私」を意識した行為で、他者のために行動するというような利他性を前提としたものではない。それでも彼らの活動は、共同性を生み出す行為につながっているのである。

また、個人がつくり出す共同性について、本研究で考察したインフォーマントは、アソシエーション活動を積極的に行なわないだ

けではなく、既存のアソシエーションに外部から働きかけようと試みる仲間たちとも組織化することを拒み、アソシエーションを介さない方が問題解決しやすい態度を表明している。彼とその仲間の活動は、表面上は集団としての形を呈しておらず、また、地域社会の改善という漠然とした目標はあるものの、活動の目的や対象は明確ではない。神出鬼没に活動が展開され、その都度新しいネットワークを創造しては姿を晦ますような存在なので、外観が非常に捉えにくい。アソシエーションの中での活動経験を踏まえて、敢えてこのような形で個人的に活動する行為には、その自由さゆえにアソシエーションとしては実現できない力がみとめられるのである。

(「個人が切り開くソシアルの地平—スペイン・ガリシアの事例から」森明子編『ヨーロッパ人類学の視座』,世界思想社(印刷中)として論文発表予定)

(3)「スペイン・サンティアゴ巡礼路友の会連盟」および巡礼ボランティアである「オスピタレロ」(Hospitaleros)に関する調査、そして巡礼宿におけるフィールドワークからは、世界中から思い思いの目的で巡礼を行う巡礼者たちを惹きつける「巡礼ホスピタリティ」の創造過程が明らかになった。それは葛藤の様相を呈していることも考察できた。

巡礼宿における巡礼ボランティア「オスピタレロ」の活動とは、「巡礼者」、「信徒会」、「オスピタレロ同士」との現実的諸関係の中で、「巡礼ホスピタリティの実現」に努め、巡礼者に対して「巡礼ホスピタリティの伝承」をしてゆくことである。だが、オスピタレロは、その活動過程で、誰よりも現実と理想の間で揺れ動き、重層的コンフリクトを抱え込む存在にもなる。巡礼者が、その巡礼中に魅力を感じてやまない「巡礼ホスピタリティ」とは、実際にはコンフリクティブな仕事といえる。このようなマイナスの側面を抱えるにもかかわらず、オスピタレロに対して、それを「やりがい」や「使命」に変換するフレームの提供、また、コンフリクトによって生ずるオスピタレロの欠員危機を、ボランティア同士の「コミュニティ」の創出によって回避する役割を担っているのは、「スペイン・サンティアゴ巡礼路友の会連盟」が提供する巡礼ボランティアの研修制度である。

研修制度においては、「巡礼スピリット」のあり方がワークショップ形式で議論されるが、議論は巡礼路友の会連盟の代表者によって誘導される。すなわち、彼らが考える「巡礼スピリット」が未来のオスピタレロたちに伝えられていくのである。また、経験を話し合う仲間がいること、そして年に数回の「集会」では経験の共有がなされる。同時にベテ

ランのための集会用意されていて、オスピタレロとしての「向上」も感じとれるようになっている。急に助けが必要となる場合に備えた、補助要員としてのオスピタレロのグループも用意されていて、彼らとはいつでもコンタクトが取れ、必要とされる巡礼宿に出向けるようになっている。

このように、世界各地から巡礼者が集い、トランスナショナルな空間といえるサンティアゴ巡礼を、「巡礼宿」において現実的に支え、日常とは異なる心地よい「サンティアゴ巡礼者のコミュニティ」を維持しているのは、巡礼ボランティア「オスピタレロ」の存在とその活動である。また、彼らは巡礼者あるいは元・巡礼者であるが、その彼らをオスピタレロに変換することで、巡礼宿運営を可能にしているのは、「スペイン・サンティアゴ巡礼路友の会連盟」による研修制度なのである。([学会発表] 3として発表)

このように本研究は全体として、文化遺産に関わり文化活動を続ける個人の視点から、アソシエーションと文化遺産との関係を考察し、そこから創造される現代的な地域性と、地域住民の間の共同性を議論している。人類学における個人への着目という視座は、何も新しいことではない。しかし、それを実際に民族誌的にとりあげ、アソシエーションの内から考察し、そこから生み出される文化や社会的な地平を問題にした研究はまだ少ない。

今後の課題としては、異なる個人の事例を増やすことと、国やEUなどのさらに上位レベルとの関係の中でより詳細に考察することである。また、サンティアゴ巡礼の世界登録年(1993年)以前・以後の地域社会の歴史的な変化の把握も考慮に入れ、分析を行いたい。そこから、「地域」の枠組みを成立させる要素の複雑な絡み合いがより動的に研究できるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 竹中宏子 2010, 「スペイン・ガリシアにおける移民の歴史と現在—ラテンアメリカとヨーロッパの狭間のガリシア」『人間科学研究』第23巻2号, pp.257-271 (査読有)

② 竹中宏子 2010, 「フィステラ—ムシエアの道(サンティアゴ巡礼路)と死の海岸の遺産化に関わる人びと—地域文化コーディネーターの活動と役割—」, 青木隆浩編『人文・自然景観の開発・保全と文化資源化に関する研究』(国立民俗歴史博物館研究報告集), pp.163-184 (査読有)

〔学会発表〕（計5件）

- ① TAKENAKA, H., “Analysis of *Le Social* from a Perspective of Individual: A Case Study of Patrimonialization in Galicia”, in International Workshop “The Anthropology of Europe and its Extending Horizons”, 2011年1月29日（於：国立民族学博物館）
- ② TAKENAKA, H., “Antropología de los albergues”, en VII Congreso Camino de Santiago, 2010年11月27日（於：Palas de Rei）
- ③ TAKENAKA, H., “Anthropology of *Los Hospitaleros*: Hospitality Constructed in a Transnational Pilgrimage”, in International Symposium “Blurring Boundaries: Toward the Anthropology of Translocalities in and beyond the Mediterranean”, 2010年3月13日（於：大阪大学）
- ④ 竹中宏子, 「『地域学』としての民俗文化研究—スペインの民俗学、民族学、人類学—」, 第842回日本民俗学会談話会, 2009年6月14日（於：成城大学）
- ⑤ 竹中宏子, 「公と私のはざまにある遺産化プロセス—『地域文化コーディネーター』の視点から」, 日本文化人類学会第43回研究大会, 2009年5月30日（於：大阪国際交流センター）

〔図書〕（計1件）

- ① 竹中宏子, 2010「集う—人間関係のなかで生きる」, 小林孝広・出口雅敏編『人類学ワークブック』, 新泉社, pp.128-174(総頁数：267頁)

〔その他〕

スペイン人類学会連盟主催(FAAEE)の研究大会において、他2名と共にシンポジウムを組織（2008年9月10～13日。於：バスク大学）
(PEREIRO, X., PRADO S. y TAKENAKA, H., Patrimonios culturales: educación e interpretación, cruzando límites y produciendo alternativas, XI Congreso de Antropología, 10-13 de septiembre de 2008, en la UPV-EHU, FAAEE)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹中 宏子 (TAKENAKA HIROKO)
早稲田大学・人間科学学術院・准教授
研究者番号：30376967

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし